

Title	2) 「研究開発コロキウム」報告〔要約版〕：〔大学院 GP〕採択：心理臨床における箱庭を介したかわりに関する研究--特別養護老人ホームでの調査から--
Author(s)	加藤, 奈奈子; 角野, 善宏; 大石, 真吾; 佐々木, 麻子; 千秋, 佳世; 小西, 佳世; 高橋, 優佳; 森崎, 志麻; 山本, 尚代; 浅田, 剛正
Citation	研究開発コロキウム：平成20年度 成果報告書 (Colloquium for Educational Research and Development) (2009): 42-43
Issue Date	2009-03-31
URL	http://hdl.handle.net/2433/143120
Right	
Type	Article
Textversion	publisher

心理臨床における箱庭を介したかかわりに関する研究

—特別養護老人ホームでの調査から—

A study of interaction through sandplay in Clinical Psychology.

—from the research at a nursing.

研究代表者 加藤 奈奈子 (D3) 教員 角野 善宏
研究分担者 大石 真吾 (D1) 佐々木 麻子 (D1) 千秋 佳世 (D3)
小西 佳世 (M2) 高橋 優佳 (M2) 森崎 志麻 (M2)
山本 尚代 (M2) 浅田 剛正

〔研究目的〕

近年、様々なフィールドに入り心理的援助を行う専門家が必要とされているが、その要請を受けて心理臨床とは異なるフィールドに入ったものの現場の職員の理解が得られず孤立し、心理的援助を行う以前に自らの役割を果たす場の構築に苦慮することは少なくない。こうした問題に指針をあたえるのが、本研究の母体となる箱庭療法研究会が行った特別養護老人ホームにおける高齢者の継続箱庭制作調査であり、この調査では、一対一のかかわりを軸としながらも、箱庭を介して個別的なかかわりが施設全体とのかかわりとしても展開していくような影響がみられた。このかかわりという側面から見た箱庭の機能は、箱庭がもたらす新たな可能性であり、このような可能性を様々な角度から検証する試みが昨年度同テーマで採択された研究である。この研究においては、アイテムの存在について検証し、またグループ制作といった実際施設に入っていく素地となる研究が行われた。本年度は、実際に施設に入っていく調査を行う形で、実践的に箱庭の可能性を検証していくことを目的とした。

〔研究経過〕

本研究では、主眼を特別養護老人ホームでの調査に置きながらも3つのプロジェクトを同時並行的に行っていた。カンファレンスを実施することによって、箱庭や心理臨床についての理解を深めていくことを目的とし、「講師招聘カンファレンス」を各々異なる角度から3回実施した(夢を素材としたカンファレンス：講師 ユング派分析家

Doris Lier 先生・講師発表形式のカンファレンス：講師 高知心理療法研究所 高野祥子先生・メンバー発表形式のカンファレンス：講師 猪股剛先生)。また、「箱庭アイテムを「つくる」体験」と題して、日本心理臨床学会第 27 回大会において、基礎調査研究を行った。さらに老人ホームでの調査を、2つのフロアに2グループがそれぞれ月に1回のペースで訪問し、継続的な調査を行った。(現在も継続中であり、9ヶ月18回の調査が終了している。)このような調査において、得られた箱庭を味わうと共に、ディスカッションを月2回の調査報告会において実施し、調査において得られたものを結果として収斂させていくことを試みた。

〔研究成果〕

①講師招聘カンファレンスに関して

カンファレンスにおいては、メンバーが主体的に発表しコメントを聞く中で、新たな知見を得ることができた。特に夢を素材としたカンファレンスでは、箱庭同様イメージの次元にある夢の1つのイメージを深めていく作業を通して、シリーズで読みとくだけではなく、イメージそのものに向き合うことを学ぶ機会が得られた。

②学会発表に関して

箱庭アイテムを「つくる」という素朴な体験を端緒として、箱庭アイテムの本質を検討した試みは、「箱庭アイテムはその都度生まれる」という考察に収斂させることができ、一定の成果が得られたと感じている。今後はこの成果を論文としてまとめていく作業が必要であると考え、現在論文執筆中である。

③老人ホームでの調査に関して

箱庭と玩具をセットにした屋台のようなワゴンを調査者が持ち込むという調査設定により、様々なかかわりが生まれ、箱庭が得られた。調査においては、調査者の目的の曖昧さが検討会の際に議論になることもあったが、箱庭として得られた結果を見ると、一見羅列的で玩具をそのままトレイに移し変えるようなものでありながら、圧倒されるようなものが多く、時に、鮮やかなものを入れているような印象も受けた。そのような結果から、入居者は、鮮やかさに目を留め、そのこと自体を箱庭にしているのではないかという考察が得られ、またその“鮮やかさ”を持ってその場にあること自体が、調査の意味となるのではないだろうかと考えられた。

また本研究は、現在も継続中であり、今後さらに異なるフィールドに入るという点から一般性を考えつつ、臨床の「知」へと収斂させていく必要があると考えている。

〔研究分担者・研究協力者〕

浅田恵美子 (M1)